

2023年度山梨学院短期大学学生チャレンジ制度 認定企画一覧

1. ■企画タイトル：《コロナ禍の高校生に向けた食育プログラムの開発》

○ チーム・シャンドマルス(食物栄養科・保育科合同グループ：21名)

代表者：食物栄養科2年 中田正俊

❖ 2023年5月現在、徐々にコロナ禍以前の社会に戻りつつありますが、高校生への「食育」の機会は十分に回復していません。若年時の食習慣は、大人になってからの食習慣と関連することから、若い内に食の基本を身につけることが大切です。そこで本企画では、山梨学院短期大学で学んだ食に関する知識を踏まえて、高校生を対象とした食育活動を実施したいと考えます。今回の「食育講座」では、朝食やバランスの良い食事の重要性を中心とした講座と、高校生にも作れる朝食や昼食の調理実習を行う予定です。当日の講座の実施に向けて、事前に複数回の試作を行います。そして、今回の「食育講座」が単に一過性のイベントで終わらないように、しっかりとしたプログラムを構築して、来年度以降も後輩たちに受け継がれるような講座を目指します。講座の方法として、楽しく学べることが重要と考え、山梨学院短期大学保育科の学生にも協力を仰ぎ、教材を使った食育プログラムなどの実施も検討しています。団体名の「シャンドマルス」には「集う」という意味があります。(7月中旬～12月中旬)

2. ■企画タイトル：《高血圧治療中でも食べられる納豆(もどき)の開発》

○ 個人：萱嶋ゼミ1名 代表者：食物栄養科2年 金丸佳音

❖ 高血圧症治療後の薬には主にワーファリンが含まれているためビタミンKを多く含む納豆の服用が禁止される。そんな方々でも食べられることができる納豆に近い納豆もどきを開発して食の質を向上させるために企画しました。(7月1日～12月31日)

3. ■企画タイトル：《調理の基礎を使用し、山梨の食材のおいしさを伝える》

○ ふかーる：28名 代表者：食物栄養科2年 小林留香

❖ 最近ニュースでも多く見られるように食材の価格が高騰している。原因はコロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻、円安などである。コロナ禍で困窮する世帯が増加する中、食材の高騰でさらに満足にご飯が食べられない家庭や子どもが増加している。フードバンク山梨の支援データから見てもその状況は明らかである。そこで私たちはできるだけ安価な食材の組み合わせを検討したうえで食材を無駄なく調理する方法を模索したい。円安の影響で海外の食材より国内、山梨県の食材の需要が高まっている。そこで鹿肉、淡水魚、果物などを題材に本来廃棄する骨やあらなどの家庭での利活用法や廃棄される果実などの活用法を考え、学校で学んだ調理の基礎を生かしおいしく食べられる調理法のリーフレットを作成し食育イベントやフードバンクの食支援などで広める。(6月～12月)

4. ■企画タイトル：《親子 de Enjoy Music!》

○ 田邊・荻原合同ゼミ20名 代表者：保育科2年 新谷 葵

❖ コロナ禍でゼミ活動が少なかったため、音楽ゼミの特色を活かして保育に関連した活動を行いたいと思ったのが今回応募したきっかけである。今回の活動では、アルテア子ども館を訪問し、0～3歳児の親子を対象に、楽器に触れたり、目の前で楽器演奏を聞くなど、家庭ではなかなか体験することが出来ない音楽を通した親子の触れ合いが出来る場を設けたいと考えている。また活動を通して、私たち自身も実習以外で子どもたちや保護者の方々と接する貴重な経験ができ、特に保育をする上での音楽表現や音楽活動についての学びや専門性が深まると考える。

（6月29日(木・Aグループ・7月5日(水) Bグループ・7月10日(月) Cグループ)

5. ■企画タイトル：《科学あそび》

○ 学友会執行部12名 代表者：専攻科 牧野愛加

❖ 私たち執行部は子どもと関わることを将来に考えている学生が多数在籍している。その中で昨年は絵本の読み聞かせから対象の年齢に応じた絵本の選び方などについて考えることができた。今年度は創作活動、主に科学遊びを通してどのような過程を踏むことが重要になるのか・どのような説明や興味の引付けができるのか等年齢に応じた保育について考え・実践する場として考える。（10月28日・29日 今年度樹徳祭の期間（2日間））

6. ■企画タイトル：《季節を感じる造形 親子ワークショップの展開》

○ 加山ゼミ11名 代表者：保育科2年 宮下葉美

❖ 山梨県立美術館アトリエなどの学外施設において、毎月1回加山ゼミ所属学生主催の親子ワークショップを行なう。季節を感じる題材について、素材や技法に対する知見を深めるとともに、周囲の自然や環境とのつながりに関心を抱き、子どもたちならではの出会いや気づきを引き出せる題材の在り方について探求し、教育実践の充実につなげる。素材に働きかけたり心を動かしたりする中で、子どもの感性を育み主体性を引き出す体験となるよう、毎回のゼミで検討を重ねる。その上で、美術の探究的活動を学生と参加する親子とが連携実施し、学生が子どもの素朴な表現に寄り添い、共感し適切な援助を行う様子を保護者と共有することで、子どもの家庭以外での様子や表現活動から見えてくる姿から子ども理解を深め、学生もまた保護者と子どもとの様子から、家庭との連携や教育機関における支援の在り方について学ぶ。活動の経験を振り返り、保育所・幼稚園・こども園への展開可能性を模索する。